

## No.2011

5月29日例会 プログラム 「総選挙の行方」 岡山日日新聞新社 社長 原田 克也様

6月5日例会 プログラム 「ロータリー親睦活動月間に因んで」 岡眞司委員長

5月29日のメニュー ・お刺身 ・鶏肉の香味パンバンジー ・そら豆と海老のサラダ ・フルーツ ・ご飯、お漬物、おみそ汁 ・コーヒー

## 前回(5月22日)例会記録

出席報告	会員総数	32名	出席者数	25名	欠席者数	7名	出席率	78.13%	前回補正率	90.63%
	前回補正者	三宅(孝)君								
	欠席者	井上君 仲田君 白石君 高橋(征)君 槌田君 上原君 山田(次)君								

## 会長挨拶

2009年3月期の決算発表は約9割以上の会社が発表されましたが、今回の決算発表で感じた事をお話しさせていただきます。本業の利益を示す経常利益と本業以外の特別損益を加味した最終損益との関連で、全産業で見ますと経常損益は約12兆円の利益、最終損益は3兆2000億円の赤字となっております。経常損益と最終損益の差額、約9兆円の赤字の50%以上の5兆円がリストラ費用(事業の再構築、人員削減、工場の縮小、閉鎖、減損、不良債権処理)として計上され、固定費の引き下げを図ったものと思われます。米国会計規準を採用している日本企業は、大幅な経常赤字を計上しています。その典型的な例が輸出産業のメインである、自動車、電気関係です。この2つだけでも飛び抜けた経常赤字を計上しています。ただしこの様に固定費を大幅に引き下げた結果、日米欧の景気対策を背景とした世界経済の回復が軌道に乗れば業績の急回復が可能となり、先行きに明るさが増してくるものと思われます。

## 幹事報告

- ・玉野手話サークルより『手話だより第290号』が届いております。
- ・玉野市立青少年育成センターより青少年健全育成だより『みちびき No.290』が届いております。
- ・RI第2690地区第10・11グループのIMレポートとロータリー手帳(JULY2009-JUNE2010)をボックスに配布させて頂いております。
- ・6月のロータリーレートのお知らせが届いております。1ドル=98円
- ・他クラブの週報・例会変更通知は回覧させて頂きます。

## 次期会長報告 東川次期会長

先月の24日、クラブ協議会を行わせて頂きました。その中で、次年度のクラブ活動計画書に載せませす、各委員会運営計画の提出をお願いしておりました。締切りは本日ですが、まだ出していない委員会の方は、来週月曜日25日までに事務局にご提出をお願い致します。

## 委員会報告

- ・ハイロー会より(谷口康則幹事): 今月の31日に県南の3RCの合同コンペが帯江コースでございます。ご参加の皆様、集合時間が8時半となっております。宜しくお願い致します。又、6月13日には播州東洋GCに於いて、大阪リバーサイドRCとの合同コンペがございます。組み合わせ表を配布させて頂きましたので、ご確認下さい。当日、朝が早いので前泊を検討しております。ご予約をお早めにお教え下さい。

## スマイル・ボックス

- ・藤田君 - 先週、沢山映像に登場しました。富永さんありがとう。富永さん、「えんじゅ」の開所おめでとうございます。
- ・富永君 - ショートステイを立ち上げました。
- ・林君 - 4月の出席100%でした。
- ・三宅(孝)君 - 連休にニュージーランドへ行ってきました。

- ・石川君 - 宣伝をさせていただきます。
- ・渡邊君 - 公害審査会の為、早退します。
- ・立石君 - 早退。
- ・三宅(保)君 - 名礼忘れ。

## プログラム 「岡山の耐火れんがの始まり」 安江 義輔君

今月で私、先日富永様からご紹介頂いたように間もなく1年になります。その間、色々ご指導頂きまして、ありがとうございます。先程の出席委員会からのお話にありましたが、3%の重みになりますように頑張ります。

実は先月、地区協議会に同行させて頂きました折りに、たまたま岡山南ロータリークラブの藤原様、私の同級生に会いました。その時にお話し頂いたのが「ロータリークラブというのは、自分の研鑽の場だ」と伺いました。なるほどなと思ったわけです。その心づもりで今後もご指導頂きたいと思っております。

私の職業分類は「不定形耐火物製造」ですので、主な需要家は鉄鋼業であります。鉄の生産に耐火物は欠かせないものでありますから三石地区の耐火煉瓦の歴史についてお話しをいたしたいと思っております。

最古の鉄と言われておりますのは、約4900年前に作られたエジプト・クフ王のピラミッドの礎石の間から発見されたものだそうです。人類が鉄と銅を発見したのはほぼ同時期とみられておりますが、青銅器の時代が続き、我が国に鉄器時代が到来するのは弥生時代以後で、広まったのは6世紀と言われております。

鉄の製法はタタラ製鉄で始まり、明治初期まで続いておりました。高炉法による製鉄は明治以後発展致しました。タタラ製鉄の初期の炉内温度は800度程度でしたが、平安時代には本格的な「ふいご」の利用によって1150度まで温度が上がり、鉄の生産が増大しました。この頃の耐火物は「耐火粘土」でありまして、鉄を作るたびに炉体は取り壊されておりました。

日本の鉄業は2度の外来ショックを経験して飛躍いたしました。先ず、1543年に種子島に鉄砲伝来ののち、10年後には武田信玄が信濃の合戦に300丁の鉄砲を用い、1570年の信長と雑賀(さいか又はさいが)衆の戦いに鉄砲300丁が使われ、いわゆる「鉄砲いくさ」が常道となりました。当時の世界で、300丁もの鉄砲を作るのは最大級の鉄砲生産であったと言われております。次に鉄の生産で大きく影響したのは黒船騒動であります。海防の為に大砲製造を画した佐賀藩で1850年に日本で最初の洋式反射炉が作られ、1857年には葦山の反射炉が完成しております。岡山藩でも、元治元年(1864年)上道郡大多羅村火打山に反射炉が築かれました。この頃から、耐火煉瓦が必要になったのです。1857年に日本で初めて様式高炉法による出鉄が釜石で成功致しました。この年を鉄鋼元年として、各製鉄所では「鉄鋼業創業150年」とロゴが入った名刺を使っておられます。本格的な高炉が釜石に完成したのは1880年(明治13年)であります。1901年(明治34年)に八幡製鉄所完成。その後、官営、民営含めて各所に製鉄所が出来ましたが、昭和9年には製鉄合同して日本製鐵となりました。

今年は横浜開港から150年だそうですが、歴史の転換点を感じます。ちなみに、宇野線開通から97年、三井造船玉野事業所発足から90年の歴史があるようです。

反射炉、高炉は1400度から1600度程度にはなるので耐火煉瓦が必要となったのです。耐火煉瓦の工場は明治8年から東京、大阪の需要地、美濃、磐城、三石等の材料産出地に起こってきました。それまでは、耐火煉瓦は輸入品でありました。

三石地区には、良質な三石蠟石が産しますので加藤忍九郎氏が明治5年に日本最初の石筆製造を始めました。当時の石筆一本の値段は米一升と同じでしたので、石筆ブームにより石筆成金が出たそうです。

明治18年に三石蠟石が耐火煉瓦の原料に適する事がわかり、明治19年には稲垣平衡氏が岡山にて耐火煉瓦の製造に成功、明治22年にパリの万博に出展して一等賞を得たとあります。これは加藤忍九郎氏が三石蠟石の扱いに熟知していた事の影響が大きいともいわれております。稲垣耐火煉瓦製造所は日清戦争もあり好況でありましたが、明治33年には廃業いたしました。加藤忍九郎氏は、石筆製造から耐火煉瓦製造に転換し、三石煉瓦製造所を明治23年に設立、25年に三石耐火煉瓦株式会社に改組、日清、日露戦争の活況を経て明治42年には職工百数十名に及んだとあります。豊富な原料産出により三石地区が耐火煉瓦産業の一大拠点となりました。現在でも、日本の耐火物生産の3分の2が備前と播州で生産されております。

加藤忍九郎氏の三男、蜜氏が宇野耐火煉瓦を宇野港で設立、その後大正13年に発明した特殊モルタルは「我が国初のエアーストモルタル(パーマタイト)」として、国立科学博物館・産業資料センターのホームページに公開されております。その後、パーマタイトは改良を重ね、現在もコークス炉の新設には新日鉄及び住金殿より特命で発注を頂いております。(一発注:600トン~1000トン)

鉄鋼業は現在、前年比40%の減産をしておりますが、世界の競争力を維持する為、高炉の大型化、コークス炉の新設(住金鹿島、新日鉄室蘭、大分、名古屋、八幡、JFE福山)などの増強計画は旺盛であり、耐火物業界にとっては力強いものがあります。(参考物件:加藤忍九郎伝)